

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3370103271		
法人名	社会福祉法人 淳風福祉会		
事業所名	若宮園グループホーム		
所在地	岡山市南区箕島3566-1		
自己評価作成日	平成 30 年 11 月 22 日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kai.gokensaku.mhlw.go.jp/33/index.php?action_kouhyou_detail_022_kan1=true&JigyosyoCd=3370103271-00&ServiceCd=320&Type=search
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	有限会社アウルメディカルサービス		
所在地	岡山市北区岩井二丁目2-18		
訪問調査日	平成 30 年 12 月 6日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

・施設は交通の不便さはあるが、敷地内に桜やモミジ、イチヨウなどの木々や、野鳥などの鳴き声や姿を見る事ができ、自然豊かな環境の中で四季を感じながら、ゆったりとした時間を過ごす事ができるようになっている。その他季節感のある特別なメニューを毎月取り入れ、ご利用者の方と一緒に作る事を基本として、視覚や嗅覚からも食事が楽しめるように努力している。
 ・継続して地域の行事参加や、近隣の学校の福祉学習に関わり、実際にご利用者とふれあって頂く事で、認知症についてや、ご利用者の施設での生活の様子について、理解を深める機会を作るよう努めている。その他、地域内にある他のグループホームとも交流を重ね、情報交換だけでなく、合同で作品展や地域行事に参加している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

食品衛生やケガに注意しながら、利用者の生活習慣や状態・状況に合わせて皆で分担しながら包丁を使って食材を切ったり、盛り付けしたりしており、料理作業を主体とした生活リハビリに取り組んでいる。毎月接遇目標を掲げ、全職員が同じ方向を向いて利用者に寄り添った介護に取り組んでいる。また、年1回家族と職員にアンケートを行い、結果を園内の接遇新聞に掲示するなど、家族や職員から出た意見や要望を職員全員で共有し、実践に繋げている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	WEB経由で法人内の情報共有が出来るシステムのトップ画面に、法人の理念と基本方針がのっており、パソコンでシステムを起動する度に目に留まるようになっていいる。事業所の方針と実践目標は、目に触れやすいスタッフルームと玄関に掲示している。	理念を玄関・スタッフルーム・パソコンのログイン画面下に掲示し、職員に周知している。また、理念をもとに実践目標を掲げ、年度変わりには理念について振り返っている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	色々な世代の地域の方の協力のもと、定期的に春と秋の地域行事に参加している。その他、近隣グループホームと合同作品展を継続して行っており、普段のご利用者の作品と併せて「金太郎」をテーマに企画・作成し、秋に西ふれあいセンターと公民館にて展示を行う。	地域の保育園児や学童保育の生徒達が慰問に来たり、近隣の中学生が福祉学習の一環として訪問したりしている。春の地域行事(桜祭り)の際、ブースを出してパンフレットを配布したり、地域の体育館で行われる秋の地域行事(演芸大会)を見に行ったりするなど、積極的に地域と交流している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	近隣の学童保育や小学生、中学生の福祉学習に関わり、座学だけでなくご利用者と直接交流する機会を設け、コミュニケーションを通して認知症についての理解を深めてもらっている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	会議では、事業所から行事や運営状況の説明と報告を行ったあとに、昼食の検食をして頂きながら、地域の委員の方と地元の情報を共有し意見交換を行っている。	民生委員や地域サロンの代表者、家族、地域包括支援センター職員などが集まり、定期的に開催している。地域情報について話し合ったり、行事報告や身体拘束の現状を説明したりしており、出た意見はサービスの向上に活かしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	制度上の不明な点などは、市町村の担当の課へその都度質問を行っている。生活保護の受給している方がおり、担当の福祉事務所の方の訪問やご家族と共に情報提供などを行っている。	福祉事務所と家族、グループホームの三者が一体となり、生活保護の申請・受給に取り組んでいる。また、実地指導の中で制度上の疑問点やカンファレンスの方法等について聞くなど、管理者が窓口となり、積極的に市担当者や連携を図っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	法人全体で、身体拘束廃止を掲げ取り組んでいる。職員は、年に2回開催する勉強会に参加し、事業所でも3か月に1回開催している委員会の内容や結果をうけて、ケアに取り組んでいる。安全面から玄関に施錠はしているが、ご利用者の出たいサインがあれば一緒に出るようにしている。	年2回、法人全体で勉強会を実施しており、事業所の年間スケジュールにも組み込んでいる。勉強会で得た知識や情報は全職員で共有すると共に、運営推進会議の中でも議題として取り上げながら、身体拘束しないケアに取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	管理者は法人内の新人研修で講師を行い、職員は定期的に開催している虐待についての勉強会に参加し、虐待行為だけでなく、虐待につながる不適切なケアについて理解を深め、職員同士の話の中で日々のケアの振り返りを行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	若宮園の定期的開催している勉強会に、職員が参加し、制度についての理解を深めている。ご利用者の中に今年から成年後見制度をご利用の方がおり、関係者(ご家族)と協力して必要な支援を行っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約締結時に、契約書・重要事項説明書などの資料をもとに、分かり易い表現で説明をするように心掛けている。今年の制度改定に関しては特に変更はなかったが、変更等がある時は書面だけでなく、面談や電話にて説明を行うようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	ご利用者の意見や要望については、担当職員が中心になって個別で面談を行い、意思疎通が困難な方には普段の生活の中から読み取り記録している。ご家族のご意見については、記録をその都度行い、情報を共有して迅速に対応できるようにしている。	ケアプラン見直しの際、担当職員が個別に面談を行い、利用者の意見や要望を聞き取っている。家族は面会時に聞き取ることが多く、聞き取った内容は職員間で共有し、積極的に運営に活かしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日々のコミュニケーションから提案や改善について、管理者から職員へ直接尋ねるようにしている。勤務日が合わない職員には、他職員と連携を取りながら意見の集約に努めている。	年2回の人事考課の中で、職員の意見や提案を聞いている。出た意見や提案は、利用者に提供するおやつや月1回の行事食メニュー等に反映している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員の経歴や個々の得意分野を考慮して業務分掌を行い、職員間でもフォローしあえるように一部はチーム体制にて行っている。加えて個々の能力に合わせ、期限や目標を設けて取り組めるようにしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	介護支援専門員の更新研修などの外部研修を推進し、中途採用の職員には外部講師が行う内部の勉強会への参加を行っている。今年は介護職員を対象にした「感染対策」の研修会に全員が参加している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	近隣のグループホーム(3施設)と同市内にあるグループホーム(3施設)の管理者と定期的な会議を設け、情報交換や相談を行っている。地域行事や合同作品展を通して、職員間の交流する機会もある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前面談で必ずご本人と会い、生活歴や現在の生活状況でお困りの事や趣味などについてを伺い、要望等の周知に努めている。必要があれば、面談を増やしたり、施設への訪問をおすすめしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	事前面談の際や入居前に、具体的なケアの内容や方法についてご家族に説明している。また、ご家族の要望や不安等については、できるだけ具体的で分かり易い表現でお答えするように努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	事前面談や相談時に本人や家族の思いや要望などを改めて確認し、心身の改善に向けた適切なケア方法の提案や介護保険サービスを分かり易く説明している。必要があれば、介護保険制度や他事業所についての説明とご紹介を行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	ご利用者が持っている知識や知恵(料理方法や花の植え方など)を、教えて頂くという姿勢で、職員はケアにあたっている。職員にはご利用者の生活を支えながら、相互扶助の関係である事を念頭におくようにと指導している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	利用者の細かな生活状況について、家族の面会時などに報告するとともに、面会や外出の回数などの相談等にも応じながら、ご家族と職員が協働してご利用者の生活を支える事ができるように努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	近所の友人・知人だけでなく、疎遠になっていた親戚の方も入所を期に、訪ねてこられる事もあった。その他、馴染みのあるご近所の方と交流の機会として、地域行事へ参加している。	近所の人が喫茶のボランティアに来るので遊びに行ったりしながら、関係が途切れないように支援している。また、馴染みの地域行事には積極的に参加している。盆や正月には大勢の親戚が集まっており、培った関係を継続するように取り組んでいる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者の相性と関係性を考慮しながら、特に新しく入所されたご利用者には職員が仲介し、孤立せず良好な関係づくりを構築し、楽しい生活を送る事ができるように支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	グループホームから他の事業所に移られた後も、本人に面会して、その後の健康状態や生活状況の確認に努めている。必要であれば、グループホームでの生活やケア方法などについて伝達している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	言葉で直接伺うだけでなく、普段の表情や言動から要望を推測し、ケアの反映に努めている。特に言葉では伝えられない方には、ご家族や以前利用していたサービス担当の方にも聞き取りを行い、把握に努めている。	日常的に声をかけ、把握に努めている。また、困難な場合は各関係施設の職員や家族から情報を得たり、利用者の生活リズムに合わせて聞き取ったりしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご本人やご家族から直接話を聞くだけでなく、了承を得て親族・友人や、これまで利用していたサービスの事業所から、その当時の状況等について情報を聞き、ケアに反映させている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	継続的に生活の様子が把握できるように、時系列で状況の把握ができる様式を用いて個人記録を行っている。日常生活のなかで、得意な事、できた事に注目し、利用者ごとに全体像が把握できるように努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	担当職員だけでなく、他の職員(医療連携の看護師を含む)からも意見を事前に聞き、介護計画に反映させるようにしている。介護計画のモニタリングは色々な職員からの意見が反映させられるような書式を用いている。	各担当職員が関係者と話し合いながら、アセスメント・モニタリング・仮原案の作成を行っている。最終的なチェックは管理者が行っている。見直しは4ヶ月毎に行っているが、入退院や利用者に変化があればその都度、見直している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個人の日誌には、健康面だけでなく、ご利用者の活動状況や言動についての記録を行うようにしている。その他、情報共有の為に申し送り簿を活用し、ケアの方法の改善や介護計画に反映させている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々にも生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	予定日以外の外出等については、感染症の流行期以外はできる限り対応している。また、安心・安全な外出を実現する為に、必要なケア方法などを伝え、車椅子の貸し出しを行い、個々の要望に可能な範囲で対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域から孤立しないよう知人や、民生委員、近隣施設の管理者等から、周辺地域の行事や支援に関する情報交換を行えるように、日頃から協力関係を築いている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	ご利用者の多くは、サービスの利用開始時に施設の協力医をかかりつけ医として希望されているが、必要な時は他の医療機関へ受診する事も可能である。	かかりつけ医の継続は可能であり、専門医への受診支援は管理者が行っている。受診後、医務室のカルテに記入し、看護師がチェックした後、主治医へ伝えられている。看護師は24時間体制で配置されており、何かあればすぐに報告・連絡・相談している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	併設の特別養護老人ホームの看護師と24時間体制で連携をとっている。また、ご利用者の日々の心身状態については、申し送りノートや電話等で報告・相談を随時行っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院中の面会をはじめ、病院のソーシャルワーカーと連携をとり、担当医や看護師等の医療関係者と管理者が連絡を密にし、ご利用者がスムーズに退院ができるよう情報交換などを行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所相談と契約時に、事業所で提供できるサービスの範囲について説明を行い、重度化や終末期の支援が必要となりそうな段階で、改めてご家族とかかりつけ医等を交えて面談を行い、今後の方針について話し合いを行っている。	入居相談時と契約時に、具体的に出来る事・出来ない事を利用者・家族に説明している。重度化した場合は、主治医が家族へ話をしている。また、職員は余裕を持って対応するように心掛けている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	若宮園で定期的に行っている勉強会へ参加し、グループワークや演習などを交えて知識を深めている。急変や事故発生時のマニュアルはフローチャート式にした物を作成し、それを見えやすい所に配置している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	若宮園全体で年に2回火災と地震を想定した避難訓練があり、グループホームも参加をしている。災害発生時は、敷地内にある事業所の職員が協力できる体制が整っている。	年2回、法人全体で避難訓練を行っており、災害時の対応も含まれている。備蓄は厨房と事務所で管理しており、非常食マニュアルもある。給食会議の中で非常食の作り方等を学んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	言葉掛けは個々に応じて、方言や分かりやすい表現を使うようにしているが、例え敬語でなくてもご利用者が不快にならないように気を付けている。	方言を上手に活用しながら、利用者の誇りやプライバシーに配慮した言葉かけを行っている。内部でロールプレイングしたり、外部のおもてなし研修に参加したりするなど、接遇面のレベルアップに取り組んでいる。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	ご利用者が要望などを言いやすい雰囲気作りを心がけ、発した言葉だけではなく、ふとした表情や言動から、思いを読み取るようにしている。できるだけご利用者自身で物事を決められるように努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	食事等、おおまかな時間の設定はしているが、一人ひとりの体調や気分に合わせて過ごす事ができるように支援している。夜の睡眠を優先し、日中はできるだけ活動的に過ごせるように、働きかけている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	訪問理・美容が、月1度あり、希望者は、カット・毛染めやパーマができるようになっていく。普段はお化粧をされていなくても、希望者には外出時や慰問への参加時に、職員がお手伝いして、されている方もおられる。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	ご利用者と職員が協働して、調理ができるようにしている。ご利用者には主に食材を切ったり、盛り付け、味見をお任せし、得意分野を活かして、できるだけ多くの方が関わられるようにしている。目の前で調理するようにし、視覚や嗅覚から食事が楽しめるように工夫している。	行事食やおやつなど、利用者の意見や要望を取り入れたメニューとなっている。下ごしらえ用に処理された食材を利用者が包丁で切ったり、盛り付けたりしている。年1回、家族と一緒にホテルバイキングを楽しんだり、ファミリーレストランで外食したりするなど、食事が楽しみなものになる様に工夫している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	体調や嚥下状態の変化がみられる時は、適切な食事形態にかえて、誤嚥に十分注意して見守りや介助を行っている。必要であれば、喉ごしが良い高栄養のゼリーやジュースなどでカロリーの補給を行っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	ほぼ全員毎食後、自分の部屋の洗面所で口腔ケアができるようセッティングや声掛け、介助を行っている。夕食後は、口腔ケアの後に、洗浄剤を使用して、義歯の清潔を保っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	日中はトイレでの排泄を促し、個々の排泄パターンを把握し、個別の時間で誘導している。夜間は睡眠を優先して、ポータブルトイレやパット、オシメなど個々に合わせた介助を行っている。	個々の排泄パターンに合わせて支援しており、日々の声かけや時間誘導によって自ら言葉を発する様になった利用者もいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	ご利用者の排便の有無をチェックして記録し、毎朝牛乳やヨーグルトなどの乳製品を提供している。午前と午後には体操をする時間を設けたり、便秘傾向な方には散歩を促したりし、身体を動かすように努めている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	基本週2回の入浴を行い、曜日や時間にとらわれず、本人の意思を尊重した入浴を心掛けている。入浴を嫌がられる時は、日時を変更したり職員をかえたりなど、臨機応変に対応している。	基本、週2回入浴支援を行っているが、希望があれば毎日でも可能である(夜間は不可)。今年は海洋深層水を使用しており、季節のゆず湯や各利用者に合わせた湯の温度で入浴を楽しんでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	ご利用者の生活習慣や、要望、状況に応じて個々に就寝時間をかえている。夜間の睡眠を優先し、昼間は生活リズムを整えるため、活動を促したり、短時間の昼寝を設けたりする方もおられる。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	職員はご利用者が服用されている薬の効能や副作用について、勉強をして理解を深めている。服薬時は職員がご利用者に手渡しか、直接口にのせる介助を行い、最後に飲み込むまで必ず確認を行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	得意分野や生活習慣をもとに、食器洗い、食器拭き、裁縫などをご利用者主導で行えるようにし、感謝を伝えながら、それぞれが役割を感じた生活ができるように支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	時節に応じて、地域行事や外食、ドライブに行けるように行事計画を立て、全員で行く場合と、ご利用者の関係性を考慮して、少人数のグループや個別の外出も実施している。	職員が事務所に用事があれば利用者を連れて出たり、以前利用していた施設へ遊びに行ったりしている。また、月2回、同一敷地内にある老健施設で行われる喫茶へ遊びに行ったりしている。家族と一緒に園内を散歩したり、外食や外泊したりする利用者もいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭については、小額に関しては家族の許可を得て、本人の管理に任せているが、基本的には、個人では管理しないようにしている。外出時の支払いについては、できるだけご利用者の方にして頂いている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご利用者の中には携帯電話を持たれている方もおられ、好きな時に電話をかけられている。その他の方で、電話を希望される場合は、ご本人と相手の方の状況を考慮しながら支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用のホールは、季節を感じられるような壁紙などを月に1回貼りかえ、その他ご利用者が作成された作品(ぬり絵、タペストリーなど)を見えやすい位置に貼っている。テーブルや席は、ご利用者の関係性を考慮して決まった席で生活して頂いている。	壁面には毎月変化する大きな歌詞カードや利用者が作成したぬり絵作品が掲示され、季節に合わせた装飾がなされている。また、ゆったりと寛げるソファーにはクッションや雑誌が置かれ、生活感を醸している。利用者は思い思いに居心地良い場所で穏やかに過ごしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホールで主に過ごされる場所は、トラブル回避の為、気の合う者同士が過ごす事ができるような配置にしている。必要であれば、ホールの利用時間を区切って、生活して頂く事も行っている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入所前にご本人やご家族から、今まで生活されていた状況を伺い、出来るだけ馴染みのある物を持参して頂き、要望に沿ったお部屋作りに努めている。	馴染みのタンスやソファーを持ち込んだり、大好きな家族写真を掲示したりしている。家具等は利用者の状態・状況に合わせた動線をもとに配置している。居室の窓からは季節の木々が見られ、四季を身近に感じられる様になっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	利用者個々の身体状況や、事故やひやりハットの再発防止で、施設内の必要な箇所に移動バーやコールマットなどの福祉用具を設置し、安全な設備環境を整え、自立した生活が送れるよう支援している。		